

## メキシコマスターズ・ラジアルクラス参戦記

東京ベイフリート 目黒たみを

### \*いざメキシコへ

成田を発ち米国のダラス国際空港で乗り換えたアメリカン空港 2261 便が、現地時間 4 月 20 日午後 2 時 36 分（日本との時差マイナス 14 時間）、無事レース会場に近いプエルトバヤルタ国際空港に到着。気温は 30 度を少し上回る程度と思われるが、日差しとアスファルトの照り返しがとても強い。それほど蒸し暑さは感じないが、暗く狭いフライトに長時間閉じ込められてきたのと時差との関係でとても眩しく、一瞬眩暈を覚える。緯度はハワイとほぼ同じなので、ハワイの初夏の気候と同じ程度であろうと察する。ここからレース会場までタクシーで 15 分。内外のレースで顔なじみとなった参加者の顔をうれしげに浮かべながら宿舎に向かう。到着した日は、女子ワールドの最終日で、偶然日本のホープ土居愛実選手とすれ違い、リオオリンピックに向けて激励する事が出来た。



### \*日本チーム：参加者の顔ぶれ

日本からのマスターズ参加者は、米国在住の 2 名を加え合計 6 名、多士済々の混成部隊となった。

チームの筆頭は、連続 11 回目の参加知人ぞ知るワールドセーラー、下関フリートの三吉さん（GM）、ハリファックス以来 2 度目となる逗葉フリートの北川さん（GM）は、体育会ヨット部の DNA を持つ本格派、初参加ながら行く先々でミラクルを巻き起こす紅一点の札幌フリート手代木さん（M）、唯一愛妻同伴の高柳さんは（M）は米国西海岸のシリコンバレーで半導体エンジニアの仕事をしているという。米国東海岸で洋家具を中心に生産から販売まで一手にこなしている実業家の阪井さん（A）は、昨年カナダ・キングストン参加に引き続き、津の全日本にも参加している有望株。筆者（目黒）はオマーン、イエールに続いて 3 度目のマスターズ参加となる。



左より北川、高柳、目黒、阪井、手代木、三吉

### \*レースの概要

2 年前のフランス・イエールでの参加総数はスタンダード、ラジアル、4.7 が一堂に集まり約 500 艇の大船団となった。そのためハーバーでの込み具合は尋常ではなく、最後のグループが日暮れと共に入艇する事もあった。その時に比べ今回は、ラジアル・スタンダードと分けて実施されることになったため、ラジアルのみ 137 艇と比較的小規模なレガッタとなり、第一グループ 44 艇（AP15 艇）/MS(29 艇) 第二グループ GM のみ 49 艇、

第三グループ 44 艇（GGM36 艇）/（75+8 艇）の 3 つのグループが午後 1 時から順番にスタートすることとなった。参加艇数が少なかったこと、事前に女子ワールドが開催されていたこともあり、艇の受け取り、インスペクション、出/着艇、海上でのレース運営等総てスマートに組織化されていたのが印象に残る。

聞くところによると運営スタッフの一部はカナダから来ており、前年のキングストンでも運営に携わった経験者との事であった。4 月 24 日から 30 日まで、悪天候とは無縁の 7 日間、途中一日の休みを入れて毎日 2 レース、合計 12 レースが滞りなく実施された。三吉さんの話では過去 11 回参加した中で、プログラム通り総てのレースが成立したのは初めてではないかとの事であった。尚昨年カナダキングストンより、マスターズ参加者の高齢化に伴いラジアルクラスのみ 75 歳以上（75+）が新設されている。

### \*レース中の気象・海況

大会期間中、朝は弱い陸風ないしは無風で始まるが、11 時を過ぎ徐々に南西の海風が入る頃、それまでに艦装を済ませた各艇が思い思いに出艇する。第 1 レースが始まる午後 1 時には、風速 5 ~ 6 m/s となり、第 2 レースが始まる頃には 7 ~ 10 m/s まで吹き上がる。時にはレース後半で、遠く太平洋洋上で発生した緩やかなウネリと合成された不規則な波がレース海面の所々に出現する難しい海面となる事もあった。比較的穏やかな海面で始まった 4 日目と 6 日目（最終日）の第 1 レースを除くと、小兵揃いの日本勢には厳しい海況だった。にもかかわらず、ブロードリーチとダウンウインドでは、これぞワールドという連続したプレーニングを大会期間中毎日堪能でき、レースの結果に関わらず参加者全員が何事にも代えがたい大いなる楽しみを満喫できた。

### \*レーザーとの出会い終わりそして再会

自分がレーザーを始めたのは 1970 年代の終わり、30 歳前後の頃である。油田開発の技術者としてアラブ首長国連邦のアブダビに始めて赴任する際、友人とレーザーを共同購入し勤務地に送ったのが始まりで、当時のセール番号 53079 はアブダビの海に浮かんだ最初のレーザーであった。ところが隣町のドバイには欧米人を中心とした 30 艇規模のフリートが複数あることが解り、慣れるに従ってシーズン中は毎週末レーザーを車載しドバイのホテルに泊まり込みでレースを楽しんでいた。やがて家庭を持ち、子供ができ、仕事の関係で生活環境が変わり次第に海から遠ざかっていった。最近アブダビが世界一周レースに参加し、レーザーを含む各種ディンギーの世界選手権を招聘しているのを見聞きすると、まさに隔世の感を覚える今日この頃である。

レーザーを再開したのは、それから 30 年以上を経て、今から 6 年前 62 歳の時である。57 歳で早期退職し、1 年の準備を経て 28ft の小型ヨットで 3 年と 10 カ月に及ぶ単独世界一周をした後となる。

以来長いブランクを埋めるため、冬期間はドミニカ共和国のレーザートレーニングセンターで練習を続けているが、いつの間にか今年で 6 回目になる。ドミニカで出会った多くのレーザー乗りが、マスターズワールド常連であることを知り、いつの間にかワールド参加も視野に入ってきた。オマーンで初めてワールドに出た時、30 年前ドバイで競い合った英国人のロジャーと再会を喜ぶことが出来た。

### \*閑話休題

出発間際にレーザーニュースの N 夫人より「ページ数の制限はありませんのでレーザーワールドの楽しいレポートとステキな写真をお待ちしております。」とのメールが入った。協力したい気持ちは山々なれど最近感受性が衰えたため「楽しいレポート」というのが難しい。ともすれば年寄りの知ったかぶり、独りよがりになる恐れがある。既にその兆候がこれまでの記載に現れている事を危惧している。そこで前もって参加者の皆さんに「ワールドに参加した動機や印象等」を書いて下さるようお願いしていた。高柳さん、北川さん、手代木さんからそれぞれ以下のような素晴らしい手記が送られてきたので紹介します。

\* 高柳さん(米国西海岸在住)

「メキシコでのマスターズ・ワールド、出てみようかな」、そう思い始めたのは、昨年の8月、サンフランシスコでのUS マスターズ、3日間にわたる強風レースでヘロヘロになった後、別れ際にピーターさんがかけてくれた「また来年のUS マスターズで会おう。いや、それともその前に、メキシコかな?」という何気ない言葉からでした。(これに関してはレーザーニュース SEP./2015 No. 222 に書かせてもらいました。) ワールドでレースをするというのはレーザーを始めた頃からの夢。でもそれは自分には縁のないものと思っていたし、20年以上本格的なレースから遠ざかっていて、その夢さえも忘れかけていました。

行ってみたい。調べてみると、アメリカの選考基準ではその年のレース成績で順番に選ぶけれど、与えられた選手枠が一杯になることは最近なく、手をあげれば行かせてもらえそうということが分かりました。となると、問題は、自分自身が頭に描いた「ワールドに出るための基準」に自分が達しているか、大会までに達することができるか、ということになりました。そしてワールドでの一番の目標を「全レースを完走し、大会を楽しむこと」に据え、レースを楽しむためには、たとえ風が強くてもそれに負けない体力をつけることだ、と考えました。

それからは、ハイクアウトベンチを工作し、朝1時間早く起きるようにして朝一のストレッチの後、ハイクアウトの練習。オフィスに出る前の1時間をジムでのヨガやコアトレーニングクラスに出る。前から続けていた週末の水泳の距離を伸ばす。YouTube で上手い選手のフォームや、ロンドンオリンピック、W杯などのレースの映像を繰り返し見て、イメージトレーニング。(睡眠学習になることも多かったですが。) セーリングのブログなどからセーリング理論、戦略・戦術、新しい走らせ方などを学ぶ。そしてもちろん、なるべく多く海の上に出る。出られる練習会やレースは全て出るようにしました。出艇する前にはその日の課題を考え、帰って来た後には、良かった点、悪かった点などをノートにつけるようにしました。

そうしていると、練習の成果は少しずつ目に見える形になり、「トシ、最近速くなったじゃないか」とセーリング仲間から冷やかされるようになり、レースでの順位にも現れてくるようになりました。うん、行けるかもしれない。そして大会に申込書を提出し、1月に入るとそれが正式に受理されたという連絡が入り、いよいよワールドが現実のものになりました。それから各課題に重点を置いた練習を続け、ハイクアウトベンチでのハイクアウトも10分間できるようになり、メキシコに出発する前には、「うん、準備ができた」と思えるようになりました。

そして迎えたヌエボ・バジャルタでのマスターズ・ワールドは、期待を上回る素晴らしいものでした。トロピカルな気候、青い海と青い空、安定して吹く風、手際のいい運営、美味しいメキシコ料理、フレンドリーな人々。特にホテルとハーバーの立地条件が素晴らしく、ホテルの部屋を出て5分も歩いたら艇のベース。毎日のレースの後には「あー、今日も吹いたなー」と心地よく疲れて海から戻り、艦装を解除して部屋に帰り、手早くシャワーを浴びて、まだ日が傾きかけたばかりの部屋の外、バナナやヤシの木の生える庭を見ながらボトル1本のメキシコビール。これは間違い無くセーラーの楽園だなぁと思いました。



レース前の艦装風景

レースは安定した風が毎日吹きました。自分にはちょっと強めの風で、中・上位にはなかなか行けませんでした。トレーニングのおかげで、オーバーパワーになってヘロヘロになるということはなく、レース期間通してフルハイクを続け、集中力も維持することができました。途中ハイクアウトをサボりそうになると、「おい、トシナリ、それがお前のフルハイクか? 真実のハイクアウトなのか?」という声が聞こえ、「おお、そうだった。まだいけるぞ!」と体を再び外に乗り出すのでした。1日2レースで、第1レースは軽風の中スタートするということも何回かありましたが、「待ってました、得意の軽風、おれの風!」と喜んで、実は軽風はみんなが得意らしく、むしろ強風のレースよりも順位を落とすということもありました。



4日目第2レース上マーク回航前

そしてレース最終日。軽風で始まった第1レースは、メキシコの海の神様が、「タカヤナギくん、最後に君にプレゼントをあげよう。でもそれを生かすも殺すも君次第だよ」と言ってくれているようでした。ラインのややピンエンドよりからいいスタートを切って、上位集団に入り、周りのトップセーラーを見ながらも自分のセーリングでスピードを維持することに心がけて丁寧に走り、5位でフィニッシュすることができました。

そして迎えた最終レース。風はいつものように吹き上がって8m/s強。レースを通して順位はあまり気にしていませんでしたが、2日目以降ずっとほぼ同じポイントで並んでいるニュージーランドのドナルド選手がいて、昨日くらいからちょっと彼もこっちを意識しているような雰囲気。吹いている風の中、台形コースの2回目の上マークを回るときにも、また彼とはほぼ同じ順位。それを得意のランニングのレグで少しリードして、「これで彼には勝ったな」と思ったのもつかの間、アビームのレグに入る前のマークでのジャイブで、メインシートがぐるんと輪を描いてブームエンドに引っかかってしまった。「よりによってこんなときに!」艇を少し上らせてその輪を取る間にドナルド選手はすぐ後ろに迫る。勝負は最後の下マークからフィニッシュラインへの短い上りのレグへとともつれ込みました。

泣いても笑ってもこれが最後だ。その5分弱の上りは、渾身の力を込めての魂のハイクアウト。彼との差を少し広げて、近い側のコミティボート側に飛び込んでフィニッシュ。そして、6日間、12レースの全てが終わりました。

レースが終わり、タイトリーチでかっ飛びながらハーバーに戻るとき、「えへへ、おれ、やったなあ」と最初は笑いがこみ上げてきたのですが、それはすぐに嗚咽に変わり、うわーん、うわーんと泣けてきたのでした。それはしばらく続きました。多分それは、5位を取れたからでも、ニュージーランド艇に競り勝てたからでもなく、100%自分の力を出し切った、という万感の思いから体の中からこみ上げてきたものだったと思います。

思えばこのワールドへの旅は、昨年の8月、「メキシコでのマスターズ・ワールド、出てみようかな」と思った時から始まっていました。そしてその大会が終わった今、「ワールドへの旅は全然終わっていない」と感じています。マスターズは同じ年齢層の人たちとレースをする。だから自然に同じ選手と次のレースでも顔を合わせることにになり、それが続いていく。だから同窓会みたいになるんですね。もちろんレースではシビアだけれども、親交を深め、お互いにリスペクトを持ち合う。75歳以上のクラス、レジェンド・フリートの人たちなんて本当にすごいと思

います。自分も、これからも長くヨットに乗り、世界中の仲間と走り合っ、お互いカッコいいいさまになれるように頑張りたいと思っています。最後に、この大会に出るのをサポートしてくれた妻に感謝したいと思います。

#### \* 北川邦弘さん(逗葉フリート)

レーザーを始めて10年ですが、最近の3年間は身体のおちこちの故障でろくに乗れませんでした。整体、鍼灸、ストレッチなどあらゆる治療を駆使してようやく五体満足で乗れるようになったのが、この3月です。

ワールドには、2009年のカナダ、ハリファックスに出場したことがあります。ワールドの魅力は、なんといっても強風でたくさんレースがこなされること。今回は、ほとんど練習のつもりで参加しましたが、期待を裏切らない環境で、成績以外は満足です(笑)。ただ、前半は食あたりで苦しみました。前夜祭で飲んだテキサラカクテルに入っていた氷のせいだと思います。海外に出たら、ドリンクはノーアイスで頼まないといけませんね。

何よりもぜいたくだったのが、時間がふんだんにあること。レースは、13時から15時までに2レースだけですが、それでも、ヘトヘトになるまで毎日しっかり吹きました。それ以外の時間は全部自由！しかも、ホテルの部屋から出艇場所まで徒歩3分。雑事から解放されて、みっちり仕事もできました。今回のように、風、交通の条件がそろえば、続けて参加したいものです。

海外の選手とは、いくつかのケースやトラブルがありました。相手が悪い場合も、自分が悪い場合もありましたが、マスターズとはいえ、ルールにはみんな厳格です(駆け引き上手ともいえますが)。8m/s前後の風では、一瞬の判断の遅れがトラブルに直結します。俊敏な判断をできるようにすることも、大事なセーリングテクニックですね。これは、実生活でもすごく役立つ鍛錬です。

自分はホテルで仕事ばかりしていましたが中日に設定されている休養日だけ、三吉さんとダウタウンを訪れ、面白い光景にいくつか出会いました。

ご承知の通り、メキシコ人は陽気でラフ。婦人警官も、クールドリンク片手に交通整理。日本では考えられません。乗り合いバスはほとんどが暴走車。制限速度などないかのようにぶっ飛ばす。うかうか横断していると、マジでひかれそうになりました。そんなバスに乗ってみると、ギターを持ったオジさんが僕の後ろに座って、いきなりギターを弾いて大声で歌い出した。何も言えず、固まるボク。いろんな人が自由に生きています。

極め付きは、人間逆さ吊りの回転ブランコ。民族衣装をまとった4人の男が高さ30mのポールに上り、逆さ吊りになったまま、回転して落ちてきます。2人は下に向かってパンザイですが、1人は笛を吹き、もう1人は太鼓を叩いています。メソアメリカ民族の雨乞いの行事らしい。そういえば、着いてから1週間まったく雨なし。命がけて雨乞いをしてきたのですね。見ている方が怖くなります。



ダウタウンで見た空中ブランコ

当初、来年のマスターズワールドは、オーストラリアのアデレードと噂されていましたが、どうやらクロアチアの可能性が高くなったようです。マスターズでは色々な出会いや楽しみ方があります。あなたも一緒に行ってみませんか。



「帰着」

illustrated by Mika Teshirogi

#### \* 手代木美香さん(札幌フリート)

5年前に癌で亡くなった夫は、約四十年間北海道でシーホッパーに乗っていました。亡くなった翌年遺品となったシーホッパーを見た時、船が「薄暗い艇庫から海に出て浮かびたい。」と言っているように思い、夫のために供養レースをしようと思えました。室蘭の社会人ヨット教室に入り、そこで始めてヨットに乗り、最初の供養レースは紋別のオホーツクヨットレースで、その日は奇しくも夫の命日でした。

供養のために始めたヨットですが、気が付けば自分の楽しみに変わっていました。と同時に何故夫が飽きもせず長い間ヨットを続けていたのかを良く理解できるようになりました。次の年から自分のためにヨットに乗ろうと決め、ホッパーを友人に託しレーザーを手に入れ、3年経ちます。その間各地でレーザーレースに参加し、そこで出会った仲間を通じてマスターズワールドの存在を知りました。どうせやるなら高い目標を持ち、海外選手の中に入っても楽しめるようにと練習を続けてきました。今回の目標は全レース完走する事でした。最初のレースではマークを間違えて失格しましたが、以後15-20ノットを超える風の中でも、一度もリタイアすることなく完走することが出来ました。

強風の多い地域で開催されるワールドに参加するための準備として、ドミニカ共和国のレーザートレーニングセンターで2度の冬季合宿に参加しました。ここで知り合いになったマスターズ常勝者のピーター(USA:75+優勝)を始め多くのレーザー乗りと再会出来るのも楽しみの一つです。オーストラリアのパネッサ(AUS:GM優勝)達も、強風下で時には最後尾を走っている私に大声で激励の言葉をかけてくれるので、疲れていても頑張れるだけでなく、とても光栄で嬉しく思いました。同時にもっともっと練習して、速く走れるようになりたいと思う気持ちが増してきます。

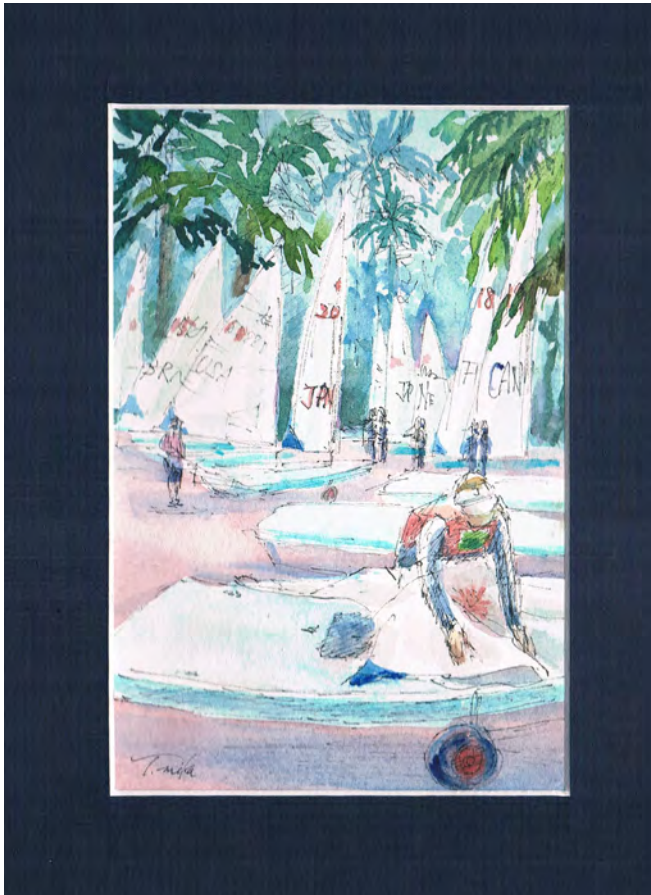


左よりピーター、手代木、ピーター夫人、ロジャー

メキシコに着くまで治安や衛生面での不安がありましたが、幸い一度も事故や体調を崩すことなく無事帰国することが出来ました。宿泊場所、船の置場、出艇場所がとても近く、何よりも感心したことは、外海(太平洋)ではかなり吹いているのに、船置き場は無風で艀装がし易かった事です。

マスターズワールドに出るまでは、一度体験すれば十分と思っておりましたが、一度体験すると結構病みつきになるものです。レースに参加することで、世界中の魅力ある都市や港町を訪れることが出来るので、又行きたいという気持ちが湧いてきます。そう思うとより一層仕事(札幌市内の数か所のカルチャーセンターや自宅のアトリエで絵画教室を主宰)に熱が入ります。

ワールドに参加するには、観光を含めると2~3週間の休暇が必要になります。そのため一年前から計画し、仕事と費用のやりくりをし、周りを説得しながらモチベーションを保ち続ける強い意志が必要です。いつもチャレンジする事に生きがいを感じている私にとって、ヨットレースに参加し続けることはとても良い人生の目標の一つであることは確かです。



チャーター艇はブルーできれいでした  
illustrated by Mika Teshirogi

米国在住の阪井さんからは、短いけれども次のような力強いコメントを頂きました。

「今大会は、欠点ばかり出て結果は去年のキングストンの大会より悪くて少しがっかりしていますが、この欠点を改善すれば上マークまでの順位3-4位をキープして次のアップウインドで順位を上げる事にも繋がると考えています。辞めようかと言っていましたが、速くなる気しかないので、続けようと思います。」

メキシコワールドでの最大のトピックスは連続11回出場の三吉さんが、最終日の第1レースでそれまでの不調を払拭するように、2位となった事でしょう。自らの最高順位の記録を更新出来ただけでなく、日本チームの実力を誇示できた一幕でした。最終日のパーティで海外の多くの友人から賞賛の声を浴びていたのが印象に残ります。

さて紙面も尽きてきたので、最後に以下2点をお伝えして締めくくりと致します。

1) せめて写真ぐらいはと思い、海上を含め幾つか撮りためたカメラを紛失してしまいました。そのため皆さんから提供して頂いた写真と、スマホの写真で間に合わせました。スイマセン!

2) レーザーがオリンピックに採用されて以来、独自のセーリング技術は、目覚ましい進化を遂げています。レーザーワールド誌 March & July 2015 と2度に渡って紹介されている Jon Emmett 氏の著作 "Coach Yourself to Win" は初級者から上級者まで、クラブレースで上位を狙うセーラーからオリンピックを目指すセーラーまで、向上心の高いディンギーセーラーには打ってつけの技術指導書です。エメット氏はロンドンオリンピック(2012年)の女子レーザークラスで金メダルを取った中国のリージャー選手のコーチとして有名であるばかりでなく、英国レーザークラスの選任コーチの傍ら現役のレーサーとしてゆるぎない実績を有しています。これまで参加したワールドマスターズでエメット氏と出会ったのを機会に、自らの非才を顧みずあえて翻訳する方向で、本人及び出版社の Fern Hurst 社と話し合いを進めています。

尚成績その他詳細につきましては、以下のウェブサイト <https://sailing.laserinternational.org/public/site/event-site/21> を参照してください。



全員集合! マリーナのイタリアンレストランで会食  
左より 目黒、阪井、北川、手代木、高柳、高柳夫人、三吉(敬称略)